

# 意識の脳科学と哲学的問題

坂口 恭久 (Yasuhisa Sakaguchi)

放送大学

心や意識についての科学研究の難しさは、言うまでも無く、研究対象が「内的経験」に関わるという点にある。19世紀～20世紀初頭の心理学の黎明期には様々な客観性に基づく学の試みが現れた。心理的量と物理的量との相関を探求するフェフィナーの精神物理学は（それが魂不滅の信念に動機付けられているにせよ）外形上は典型であろう。また今日からすると興味深いことに、実験心理学の父とされるヴントの主な研究方法は「内観」であった。しかしこれは、例えば「動物学」が、まず動物についての「観察」から始まるように、内的経験の諸相－視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚など各モダリティーの感覚や感情・欲求など－内的に立ち現れる「自然」をまず観察・分類・記述することから科学は始まるとも言える。そのほか、例えば「錯視（錯覚）」の研究が成り立つのは、物理的秩序とは異なる「見え」の知覚・報告に関して人間にほぼ共通する客観性（再現性）が存在するからである。

今日の「心の哲学」においても困難の中心は内的経験、私秘的な質的側面、クオリアに関連している。チャーマーズの言う「意識のハードプロブレム」とは、なぜある物理・生理学的過程は内的経験・主観的経験を産出できるのか、と言い換えることができよう。

今日、心や意識をめぐる科学的（とりわけ脳科学的）研究が大きな高まりをみせている。しかしそれらと哲学との関わりは必ずしも明確でない。

本発表では、神経科学者、渡辺正峰氏の近刊『意識の脳科学 「デジタル不老不死」の扉を開く』（2024）を主な手がかりとして、心や意識に関する科学（特に脳科学）と哲学的問題の交点を見極め、交差（あるいはすれ違い）のありさまについて考察したい。渡辺氏の著書は近い将来、人間の意識を機械脳に転送し、機械脳の中で長らえるための具体的ロードマップ（その途中で脳半球を機械脳に置き換えたりする）を示しており、きわめて刺激的なものである。また、「意識の自然則」の考えも議論したい所だが、本発表では以下の2点に考察を絞る。

【1】一つ目は下の問いに集約できる：

「心的状態や意識のNCCを見つけることは心や意識の問題の最終回答となりえるか？」

NCCとは"Neural Correlates of Consciousness 意識の神経相関物"であり、おそらくは、心的状態や意識を実現している何らかの「ニューロン網の集合構造」である。もちろんそれが見つかれば脳科学の革命的な大進歩となる。しかし哲学的には、

脳状態Pが生じている時には、必ず心的状態Qが生じている

という、心脳平行論に終わるのではないか？ということだ。これは、ハードプロブレムは何かということと繋がる。

【2】二つ目は、「私は私の経験しか経験できない」（他人の経験を直接、経験はできない）というアイデアから帰結する問題である。

さて、ラディカルな脳科学者はこう言うかもしれない。クオリア（他人の経験）の問題は、互いの脳を電極・電線でつなぎ、「直接」他者の脳状態を経験すれば済む、と。そうなのだろうか？

私はここで、おそらく今までなされていない思考実験を提案したいと思う。

渡辺氏は生体脳から機械脳に意識を移す際、チャーマーズの「フェーディングクオリア議論」（で用いられる漸進的置換議論）を援用する。おなじ議論を使えば、私の脳状態を完全にコピーした「ドッペルゲンガー」を作ることは単なる思考実験を超えて可能性が有るかもしれない。

いずれにせよ、私とドッペルゲンガーとの間でクオリア問題が生じるかどうかを考えよう。脳状態が同一であることは仮定なので、同じ心的状態にあることは、物理主義を仮定すれば導かれる。しかし、認識的問題はどうだろうか？私とドッペルゲンガーは同じ感覚的クオリアを持っているのだろうか？

この場面でも《懷疑》は抑えられないと思う。「彼（ドッペルゲンガー）であるとはいかなることか？」という疑問はここでも生じる。

たとえば、脳・心の状態が同一であっても、私と彼は他人である。私は私の経験しか経験できない。

<参考文献>

Chalmers, D. J. (1996). *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*. Oxford University Press. (デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識する心：脳と精神の根本理論を求めて』林一訳、白揚社、2001年)

Chalmers, D. J. (2010). *The Character of Consciousness*, Oxford University Press. (デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識の諸相（上・下）』、太田紘史・源河亨・佐金武・佐藤亮司・前田高弘・山口尚訳、春秋社、2016年)

渡辺正峰（2017）、『脳の意識 機械の意識』、中公新書

渡辺正峰（2024）、『意識の脳科学 — 「デジタル不老不死の扉」を開く』、講談社現代新書

Wittgenstein, L. (1958). *The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell (ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン『青色本』大森荘蔵訳、ちくま学術文庫、2010年)